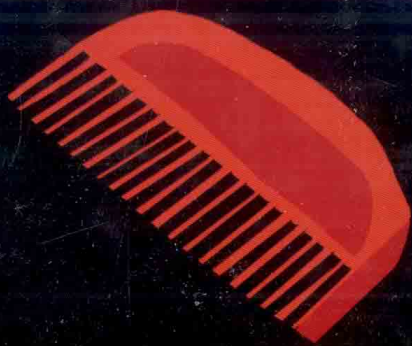
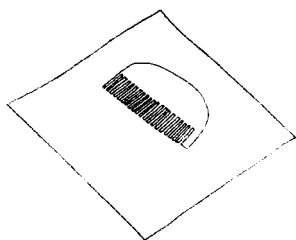


春琴抄

谷崎潤一郎



春琴抄



谷崎潤一郎

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進・編 日本の文学 59

春琴抄

著 者 谷崎潤一郎

責任編集 市古貞次（古典編）

小田切進（近代編）

発行日 昭和五十九年八月一日 初版第一刷発行

発行所 株式会社 ほるぷ出版

代表 中森時人

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五四―七〇三二（代）

総発売元 株式会社 ほるぷ

東京都新宿区新宿二―十九―十三

電話（〇三）三五六―六二二一（代）

製 作 東京連合印刷株式会社

印刷 図書印刷株式会社

春
琴
抄



春琴、ほんとうの名は鵜屋琴、大阪道修町の薬種商の生れで歿年は明治十九年十月十四日、墓は市内下寺町の浄土宗の某寺にある。先達通りかゝりにお墓参りをする気になり立ち寄って案内を乞うと「鵜屋さんの墓所はこちらでございます」といって寺男が本堂のうしろの方へ連れて行った。見ると一と叢の椿の木かげに鵜屋家代々の墓が数基ならんでいるのであったが琴女の墓らしいものはそのあたりには見あたらなかった。むかし鵜屋家の娘にしかくの人があった筈ですがその人のはというとき暫く考えていて「それならあれにありますの

がそれかも知りませぬ」と東側の急な坂路さかみちになっている段々の上へ連れて行く。知っての通り下寺町の東側のうしろには生国魂神社いくたまのある高台が聳そびえているので今いう急な坂路は寺の境内からその高台へつゞく斜面なのであるが、そこは大阪にはちょっと珍しい樹木の繁った場所であって琴女の墓はその斜面の中腹を平らにしたさゝやかな空地に建っていた。光誉春琴恵照禅定尼、と、墓石の表面に法名を記し裏面に俗名鵲屋琴、号春琴、明治十九年十月十四日歿、行年五拾八歳とあって、側面に、門人温井ぬくい佐助すけ建立をたつと刻してある。琴女は生涯鵲屋姓を名のっていたけれども「門人」温井けんぎやう検校と事実上の夫婦生活をいとなんでいたので斯かく鵲屋家の墓地と離れたところへ別に一墓を選んだのであろうか。寺男の話では鵲屋の家はどうに没落してしまひ近年は稀まれに一族の者がお参りに来るだけであるがそれも琴女の墓を訪おもうことは殆ほとんどないのでこれが鵲屋さんの身内のお方のものであろうとは思わなかったという。すると此この仏さまは無

縁になっているのですかという、いえ無縁という訳ではありませんね萩の茶屋の方に住んでおられる七十恰好の老婦人が年に一二度お参りに来られます、その方は此のお墓へお参りをされて、それから、それ、此処に小さなお墓があるでしょうと、その墓の左脇にある別な墓を指し示しながらきつとそのあとで此のお墓へも香華を手向けて行かれますお経料などもその方がお上げになりますという。寺男が示した今の小さな墓標の前へ行つて見ると石の大きさは琴女の墓の半分くらいである。表面に眞譽琴台正道信士と刻し裏面に俗名温井佐助、号琴台、鵬屋春琴門人、明治四十年十月十四日歿、行年八拾三歳とある。即ちこれが温井検校の墓であった。萩の茶屋の老婦人というのは後に出て来るから此処には説くまいと此の墓が春琴の墓にくらべて小さく且その墓石に門人である旨を記して死後にも師弟の礼を守っているところに検校の遺志がある。私は、折柄夕日が墓石の表にあか／＼と照っているその丘の上に亘んで脚

下にひろがる大大阪市の景観を眺めた。蓋し此のあたりは難波津の昔からある丘陵地帯で西向きの高台が此処からずっと天王寺の方へ続いている。そして現在では煤煙で痛めつけられた木の葉や草の葉に生色がなく埃まびれに立ち枯れた大木が殺風景な感じを与えるがこれらの墓が建てられた当時はもっと鬱蒼としていたであろうし今も市内の墓地としては先ず此の辺が一番閑静で見晴らしのよい場所であろう。奇しき因縁に纏われた二人の師弟は夕靄の底に大ビルディングが数知れず屹立する東洋一の工業都市を見下しながら、永久に此処に眠っているのである。それにしても今日の大阪は検校が在りし日の倂をとどめぬ迄に変わってしまったが此の二つの墓石のみは今も浅からぬ師弟の契りを語り合っているように見える。元来温井検校の家は日蓮宗であって検校を除く温井一家の墓は検校の故郷江州日野町の某寺にある。然るに検校が父祖代々の宗旨を捨てゝ浄土宗に換えたのは墓になっても春琴女の側を離れまいという殉

情から出たもので、春琴女の存生中、早く既に師弟の法名、此の二つの墓石の位置、釣り合い等が定められてあったという。目分量で測ったところでは春琴女の墓石は高さ約六尺、検校のは四尺に足らぬ程であらうか。二つは低い石甃の壇の上に並んで立っていて春琴女の墓の右脇に一本の松が植えてあり緑の枝が墓石の上へ屋根のように伸びているのであるが、その枝の先が届かなくなつた左の方の二三尺離れたところに検校の墓が鞠躬如として侍坐する如く控えている。それを見ると生前検校がまめ／＼しく師に事えて影の形に添うように扈從していた有様が偲ばれ恰も石に霊があつて今日もなおその幸福を楽んでいるようである。私は春琴女の墓前に跪いて恭しく礼をした後検校の墓石に手をかけてその石の頭を愛撫しながら夕日が大市街の彼方に沈んでしまふまで丘の上に徘徊していた。

○

近頃私の手に入れたものに「鵬屋春琴伝」という小冊子があり此れが私の春琴女を知るに至った端緒であるが、此の書は生漉きの和紙へ四号活字で印刷した三十枚程のもので察するところ春琴女の三回忌に弟子の検校が誰かに頼んで師の伝記を編ませ配り物にでもしたのであらう。されば内容は文章体で綴っており検校のことも三人称で書いてあるけれども恐らく材料は検校が授けたものに違ひなく此の書のほんとうの著者は検校その人であるとして差支えあるまい。伝に依ると「春琴の家は代々鵬屋安左衛門を称し、大阪道修町に住して薬種商を営む。春琴の父に至りて七代目也。母しげ女は京都駄屋町の跡部氏の出にして安左衛門に嫁し二男二女を挙ぐ。春琴はその第二女にして文政十二年五月二十四日を以て生る」とある。又曰く、「春琴幼にして穎悟、加うるに容姿端麗にして高雅なること譬えんに物なし。四歳の頃より舞を習いけるに举措進退の法自ら備わりてさす手ひく手の優艶なること舞妓も及ばぬ程なりければ、師も

しば／＼舌を巻きて、あわれ此の児、此の材と質とを以てせば天下に嬌名を謳われんこと期して待つべきに、良家の子女に生れたるは幸とや云わん不幸とや云わんと呟きしとかや。又早くより読み書きの道を学ぶに上達頗る速かにして二人の兄をさえ凌駕したりき」と。これらの記事が春琴を視ること神の如くであつたらしい検校から出たものとすればどれほど信を置いてよいか分らないけれども彼女の生れつきの容貌が「端麗にして高雅」であつたことはいろ／＼な事実から立証される。当時は婦人の身長が一体に低かつたようであるが彼女も身の丈が五尺に充たず顔や手足の道具が非常に小作りで繊細を極めていたという。今日伝わっている春琴女が三十七歳の時の写真というものを見るのに、輪廓の整った瓜実顔に、一つ一つ可愛い指で摘まみ上げたような小柄な今にも消えてなくなりそうな柔かな目鼻がついている。何分にも明治初年か慶応頃の撮影であるからと／＼に星が出たりして遠い昔の記憶の如くうすれているの

でそのためにそう見えるのでもあろうが、その朦朧もうろうとした写真では大阪の富裕な町家の婦人らしい気品を認められる以外に、うつくしいけれども此れこという個性の閃ひらめきがなく印象の稀薄きはくな感じがする。年恰好としかつこうも三十七歳といえはそうも見え又二十七八歳のようにも見えなくはない。此の時の春琴女は既に両眼の明あかりを失ってから十有余年の後であるけれども盲目というよりは眼めをつぶってという風に見える。嘗かつて佐藤春夫が云ったことに聾者ろうしゃは愚人のように見え盲人は賢者のように見えるという説があった。なぜならつんぽは人の言うことを聴まゆこうとして眉まゆをしかめ眼や口を開け首を傾けたり仰向けたりするので何となく間の抜けたところがある然しかるに盲人は静かに端坐たんざして首をうつ向け、瞑目めいもく沈ちん思しするかの如き様子をするからいかにも考え深そうに見えるというのであつて果して一般に当て嵌はまるかどうか分らないがそれは一つには仏菩薩ぶつぼさの眼、慈眼じげん視衆生じしゆじようという慈眼なるものは半眼に閉じた眼であるからそれを見馴みなれているわ

れ／＼は開いた眼よりも閉じた眼の方に慈悲や有難みを覚え或る場合には畏れを抱くのであろうか。されば春琴女の閉じた眼瞼にもそれが取り分け優しい女人であるせいか古い絵像の觀世音を拝んだようなほのかな慈悲を感じるのである。聞くところに依ると春琴女の写真は後にも先にも此れ一枚しかないのであるという彼女が幼少の頃はまだ写真術が輸入されておらず又此の写真を撮った同じ年に偶然或る災難が起りそれより後は決して写真などを写さなかった筈であるから、われ／＼は此の朦朧たる一枚の映像をたよりに彼女の風貌を想見するより仕方がない。読者は上述の説明を読んでどういふ風な面立ちを浮かべられたか恐らく物足りないぼんやりしたものを心に描かれたであらうが、仮に實際の写真を見られても格別これ以上にはっきり分るということはなからう或は写真の方が読者の空想されるものよりもっとぼやけているでもあらう。考えてみると彼女が此の写真をうつした年即ち春琴女が三十七歳の折に検校も亦盲

人になったのであって、検校が此の世で最後に見た彼女の姿は此の映像に近いものであったかと思われる。すると晩年の検校が記憶の中に存していた彼女の姿も此の程度にぼやけたものではなかったであろうか。それとも次第にうすれ去る記憶を空想で補って行くうちに此れとは全然異なった一人の別な貴い女人を作り上げていたであろうか。

○

春琴伝は続けて曰く、「されば両親も琴女を視ること掌中の珠の如く、五人の兄妹達に超えて独り此の児を寵愛しけるに、琴女九歳の時不幸にして眼疾を得、幾くもなくして遂に全く両眼の明を失いければ、父母の悲歎は大方ならず、母は我が児の不憫さに天を恨み人を憎みて一時狂せるが如くなりき。春琴これより舞技を断念して専ら琴三絃の稽古を励み、糸竹の道を志すに至りぬ」と。春琴の眼疾というのは何であつたか明かでなく伝にも此れ以上の記載がないが後

に検校けんぎょうが人に語かたつてまことに喬木きやうぼくは風に妬ねたまれるとやら、お師匠ししやうさまは御器量
や芸能が諸人にすぐれておられたばかりに一生のうちに二度までも人の嫉ねたみを
お受けなされたお師匠さまの御不運は全く此の二度の御災難のお蔭かげじやと云つ
たのを思い合わせれば、何かその間に事情が伏在するようでもある。検校は又
お師匠さまのは風眼ふうがんであつたとも云つた。春琴女は甘やかされて育つたゝめに
驕慢きやうまんなところはあつたけれども言語動作が愛嬌あいきやうに富み目下の者への思いやりが
深く加うるに至つて花やかな陽気な性質であつたから、人あたりもよく兄弟仲
も睦むつじく一家中の者に親しまれたが一番末の妹に附ついていた乳母が両親の愛情
の偏頗へんぱなのを憤ひそつて密かに琴女を憎んでいたという。風眼というものは人も知
る如ごとく花柳病の黴菌ばいきんが眼の粘膜を侵す時に生ずるのであるから検校の意は、蓋けだ
し此の乳母が或る手段を以て彼女を失明させたことを諷ふうするのである。しかし
確かな根拠があつてそう思うのか検校一人だけの想像説であるのか明瞭めいりやうでない。

春琴女が後年の烈しい氣象を見れば或いはそういう事実が性格に影響を及ぼしたのかとも猜せられなくはないが此の事に限らず検校の説には春琴女の不幸を歎くあまり知らず識らず他人を傷つけ呪うような傾きがあり俄かに悉くを信ずる訳に行かない乳母の一件なども恐らくは揣摩憶測に過ぎないであろう。要するに此処では敢て原因を問わず唯九歳の時に盲目になったことを記せば足りる。そして「これより舞技を断念して専ら琴三絃の稽古を励み、糸竹の道を志」した。つまり春琴女が思いを音曲にひそめるようになったのは失明した結果だということになり彼女自身も自分のほんとうの天分は舞いにあった、わたしの琴や三味線を褒める人があるのはわたしというものを知らないからだ眼さえ見えたら自分は決して音曲の方へは行かなかったのにと常に検校に述懐したという。これは半面に自分の不得意な音曲でさえ此のくらいに出来るといふ風に聞え彼女の驕慢な一端が窺われるが此の言葉なども多少検校の修飾が加わってはいし